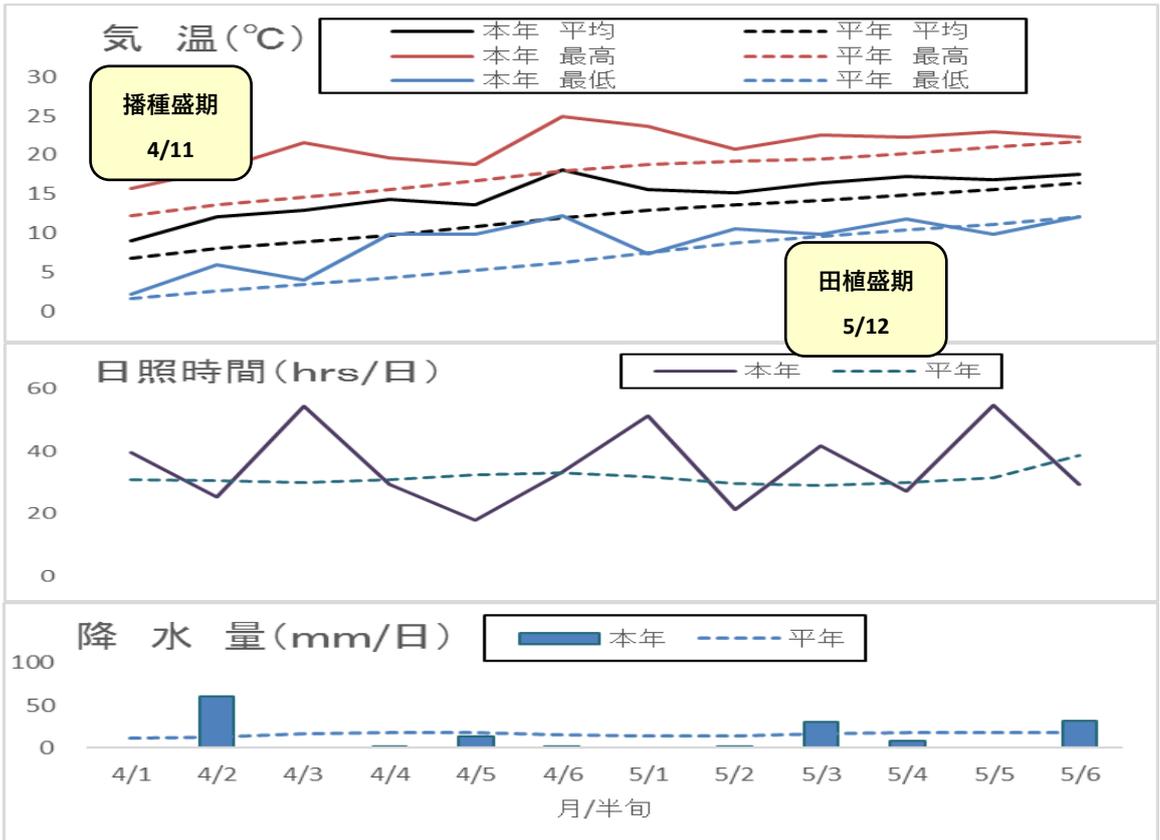


～活着は概ね良好 初期生育は平年並みか？～

1 令和6年の気象 (古川アメダス)



◆5月30日発表 東北地方の1か月予報(6月1日～6月30日までの天候見通し)【気象庁ホームページより】

- ・期間の前半は、天気は数日の周期で変わる。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多い。
- ・向こう1か月の気温は、高い確率40%、平年並み若しくは低い確率30%。
- ・降水量は、多い若しくは平年並みの確率30%、少ない確率40%。
- ・日照時間は、多い確率40%、平年並み若しくは少ない確率30%。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)			
気温	東北地方	向こう1か月 06/01～06/30	30 (低) 30 (平) 40 (高)
		1週目 06/01～06/07	50 (低) 40 (平) 10 (高)
		2週目 06/08～06/14	20 (低) 40 (平) 40 (高)
		3～4週目 06/15～06/28	20 (低) 40 (平) 40 (高)
降水量	東北地方	向こう1か月 06/01～06/30	40 (多) 30 (平) 30 (少)
日照時間	東北地方	向こう1か月 06/01～06/30	30 (多) 30 (平) 40 (少)

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

2 播種・田植状況

(1) 播種期（4月30日現在）

- ・播種始期は平年より1日遅い4月3日，盛期は平年並みの4月11日であった。終期は平年並みの4月21日であった。
- ・県では，近年の温暖化による生育初期の茎数過剰傾向や登熟期の高温障害回避を踏まえ，田植えを遅くする「晩期栽培」を推進しているが，概ね平年並みの播種時期となった。

区 分	播種始期 (5%)	播種盛期 (50%)	播種終期 (95%)
本 年	4月3日	4月11日	4月21日
前 年	4月2日	4月11日	4月21日
平 年	4月2日	4月11日	4月21日
平年差	1日遅い	並	並

(2) 田植進捗状況（5月29日現在）

- ・田植始期は平年より1日早い5月3日，盛期は1日遅い5月12日であった。終期は1日遅い5月23日であった。
- ・育苗期間の高温の影響で，苗の生育が早く，田植えはやや早めに始まったと考えられる。

区 分	田植始期 (5%)	田植盛期 (50%)	田植終期 (95%)
本 年	5月3日	5月12日	5月23日
前 年	5月4日	5月12日	5月23日
平 年	5月4日	5月11日	5月22日
平年差	1日早い	1日遅い	1日遅い

3 生育状況（5月30日現在）

- ・一部のJAが実施した生育調査によれば，移植時期によって多少の差はあるものの，草丈は平年並み～やや短く，茎数は概ね平年並み，葉数は平年並み～やや少ない。
- ・活着は，概ね順調であったが，強風等の影響で植え痛みが生じた地域もある。
- ・移植が早く，生育が順調に進んだほ場では，分けつが始まっている。

4 今後の管理

(1) 適正な生育量確保（水管理）

- ・活着後は水深3cm程度の浅水管理を基本とし，低温の日は5～6cmの深水で保温して，茎数の増加を促進する。
- ・生わらや未熟堆肥を施用した水田では，一時落水等でガスの発生や土壌還元による生育抑制を防ぐことが必要である。

(2) 雑草防除

- ・中期除草剤は，使用時期の幅が狭く，水稻やノビエの葉齢に制限がある剤が多いので，ラベルをよく読んで処理する。
- ・薬剤の選定，使用にあたっては，最新の農薬登録情報を確認する。

- ・除草剤を使用する際は、止水期間を1週間程度とすることが効果のポイントである。
- ・ノビエやイヌホタルイなどが残草すると、斑点米の原因となるアカスジカスミカメが水田内に侵入し産卵するので、防除を徹底する。
- ・直播栽培では、苗立ちが確保されたら時期を逃さず湛水して除草剤を散布する。

(3) 病害虫の発生と防除

イ いもち病対策

- ・残苗は、本田での「いもち病」の発生源となるため、補植終了後は速やかに苗を除去し、裏返す等、適正に処分する。5月31日現在、かなりの残苗が確認されている。
- ・飼料用米や直播栽培など、箱施用剤を使用していない場合は、各種水面施用剤を適期に散布する。

ロ 本田初期害虫（イネドロオイムシ、イネミズゾウムシ）

- ・宮城県病害虫防除所が公表した「発生予報第2号（5月27日発行）」によれば、イネドロオイムシの「発生時期は平年よりやや早い6月第2半旬」で、「発生量はやや少」と予想されている。また、イネミズゾウムシの「本田侵入始期は平年並みの5月第6半旬」で、「発生量は平年並」と予想されている。
- ・箱施用剤で防除を行った場合でも、発生が多い場合は、下表の要防除密度を参考に、必要に応じて茎葉散布剤による防除を実施する。



表1 対象害虫の侵入盛期(平年)と要防除密度

害虫名	発生時期	防除時期		要防除密度
		本年推定	平年	
イネドロオイムシ	侵入盛期	5月第6半旬 (5月26～31日)	6月第1半旬 (6月1～5日)	侵入盛期(平年:6月第1半旬)の 成虫密度:100株当たり25頭
	ふ化盛期	6月第2半旬 (6月6～10日)	6月第3半旬 (6月11～15日)	産卵盛期(平年:6月第2半旬)の 卵塊密度:100株当たり80個
イネミズゾウムシ	侵入盛期	5月第6半旬 (5月26～31日)	5月第6半旬 (5月26～31日)	侵入盛期の成虫密度(畦畔際2 m程度):100株当たり140頭 ※晩期栽培の場合は70頭

- ・イネドロオイムシについては、チアメトキサム剤（商品名：デジタルコラトップアクタラ箱粒剤、デジタルメガフレア箱粒剤等）に対する薬剤感受性低下個体群が確認されているが、同個体群でジアミド系に対する感受性は低下しておらず、効果も認められている。

5 乾田直播栽培における今後の管理

- ・4月が高温で推移したことにより、出芽は平年より早く、5月30日現在の生育は草丈10～20cm、葉齢は3～5葉程度で、分けつが始まっているほ場も見られる。
- ◆出芽が遅れている場合は、ほ場全体に薄く入水し（フラッシング）、出芽を促す。
- ・苗の生育が揃ったら、5cm程度の水深を確保し、雑草防除のため土壌処理剤（初中期剤）を散布する。散布後の管理は、移植栽培と同様とする。